

第 1 回北海道SDGs推進懇談会における主な意見について

	主な意見	道の対応の考え方
1	あらゆるステークホルダーに対応するビジョンを策定するならば、ビジョンを策定するプロセスに多様なステークホルダーが関与すべき。道が予定している策定プロセスでは少し拙速であり、もう少し丁寧にビジョンを策定する必要がある。	<p>ビジョンの策定に当たっては、SDGs 推進懇談会での意見交換をはじめ、道内各分野の団体や学識経験者、地域の有識者等で構成する道の附属機関の北海道総合開発委員会での議論、新たに設立するネットワーク組織会員や市町村、各種団体への意見照会や、さらにパブリックコメントなどを通じて、幅広くご意見を伺いながら、検討していきます。</p> <p>また、道内の幅広い分野や地域で、SDGs の推進に向けた様々な取組が展開されるよう、基本的な指針となるビジョンをできるだけ速やかにとりまとめ、多様な主体と共有していきたいと考えていることから、年内を目途に策定したいと考えています。</p> <p>なお、ビジョンの策定後においても、ビジョンを踏まえたSDGs 推進に関して、様々な主体の方々と情報共有や意見交換等を行っていく考えです。</p>
2	策定に当たっては懇談会以外の場でも意見を聞くということが必要であり、また、ビジョンが策定された後もビジョンに対する意見を引き続き聞いていくことが必要。	
3	「(仮称) 北海道SDGs 推進ネットワーク」を今後立ち上げるが、ビジョンの策定に当たって懇談会メンバー以外のこうしたネットワークの参加者の方々の意見も聞いていくことも必要。	
4	そもそもSDGs は誰のためのものかということ、ここにいる我々のためではなく、子どもや孫たちが安全・安心に暮らしていける北海道のために、今の我々のライフスタイルがこのままでいいのか、というところがSDGs。そう考えると、2030 年まで後 12 年しかなく、ビジョン策定のディスカッションに時間をかけては間に合わない。	

	主な意見	道の対応の考え方
5	子どもや将来のことを考える視点に加え、今既に困っている人、大変な状況にいる人たちも置いてきぼりにしないというところも重要。	SDG sの「誰一人取り残さない」といった観点を踏まえながら、女性や障がい者の活躍促進、子どもの貧困への対応などについても記載していくことを検討していきます。
6	SDG sの達成に向けた取組が、全体としては進んでも、例えば女性や障がいのある方など取り残されてしまいがちな方々をどうしていくのかということについて考えることも必要。	
7	SDG sでは「誰一人取り残さない」というスローガンを掲げているが、逆を言えば、これまでの開発の中で色々な人が取り残されてきたという反省の上に成り立っている。国連でSDG sを策定する際には、策定のための会議の中に女性、若者・子ども、先住民族など、取り残されがちな人々で構成したグループでの議論があった。骨子で示されているステークホルダーの分類では「誰一人取り残さない」ことへの姿勢が感じられない。	
8	ステークホルダーについては、ビジョン骨子の「4 ビジョンの推進」に記載されている方々だけではなく、もっと多様な方々を明記すべき。	SDG sの推進に当たっては、道民の皆様をはじめ、多様な主体の理解と参画が広がり、SDG sを自らの活動と関連付けながら幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが重要と考えています。
9	ステークホルダーの分類にあたって、「企業」と一括りで記載されているが、企業と行っても投資家や経営者、労働者などもいて、それぞれがSDG sに対する考え方が違う。また、企業の業態によっても考える視点は違う。それぞれの視点でSDG sを考えていくことが必要。	このため、ビジョンでは、主な主体ごとに期待される役割や取組イメージ、各主体の活動内容に応じたSDG sへのアプローチ手法などについて、具体的に、かつ分かりやすく記載することを検討していきます。

	主な意見	道の対応の考え方
10	ビジョンで用いる指標については、道の既存計画の指標と同様のものに留まるのであれば、せつかく新しいビジョンを作るには意味がないのではないかと。多様な意見を踏まえて指標を追加したり、見直すことが必要。	指標については、取組の目標や進捗状況を分かりやすく示すため、原則、次の考え方に沿って項目を選定したいと考えており、参考となるデータについても、幅広く検討していきます。 ① 経済社会の状況や道民の暮らしの状況を表すアウトカム指標 ② 都道府県順位の把握や全国平均値との比較ができる指標 ③ 原則、毎年または隔年で公表される指標
11	指標については、様々な団体が取り扱っている指標も参考にしているかどうか。	
12	骨子の「2 北海道を取り巻く現状」の現状・課題は、せつかくSDGsというのであれば、17ゴールごとに記載した方がよい。また、経年変化で見られるとよりよい。	本道においてSDGsを推進するためには、SDGsと関連付けながら、本道の現状や課題を明らかにし、道内の多様な主体と共有することが必要と考えています。 このため、SDGsのゴールやターゲットと関連性が高い各種データを用いながら、北海道の現状や課題について、道民に身近な区分ごとに再整理し、可能な限り経年変化が分かるように、表やグラフを用いるなど工夫しながら記載していきたいと考えています。
13	北海道で起きている問題点を明確化するというをまずはやるべき。	
14	ビジョンで一番の中心になるのが「めざす姿」であり、多様なステークホルダーにとってのビジョンであるためには、「めざす姿」について議論が必要。骨子で示されている「めざす姿」を前提にせず議論していきたい。	SDGsを推進していくためには、道民の皆様と、将来の北海道のあるべき姿を共有することが重要と考えており、懇談会をはじめ、様々なご意見を伺いながら検討していきます。
15	ビジョンは時間や環境など、状況の変化に合わせて変えていくべき。	ビジョンについては、社会経済情勢の変化やSDGs推進に関する国の動向なども踏まえ、必要に応じて見直すことにしています。
16	ビジョンの骨子は、全体的に見て外に向けて北海道をアピールするというイメージを感じる。北海道に住んでいる一人一人が幸せに生きていけるかという視点をもっと出さないと、SDGsを推進していきたいという意欲が沸かないのではないかと。	ビジョンは、SDGsの推進に積極的に取り組むことによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、全ての道民が、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会の実現をめざしており、その主旨が道民の皆様に分かりやすく伝わるよう検討していきます。

	主な意見	道の対応の考え方
17	資料3-1の「4 ビジョンの推進」の「企業の取組」に「中核的事業を通じたSDG s達成への貢献」と記載されているが、貢献から少し踏み込んで「責任」と記載しても良いと思う。CSRも責任である。	企業の取組の記載内容については、懇談会をはじめ、様々なご意見を伺いながら検討していきます。
18	SDG sの普及にあたり、ハードルを上げない方がよい。普段行っている活動の大体がSDG sに繋がっているということを知らないのが現状。意識を変えること、普段の活動の中でできることだと理解できることが重要。	SDG sの推進に当たっては、道のみならず道民の皆様をはじめ多様な主体の理解と参画が広がり、SDG sを自らの活動と関連付けながら幅広い分野や地域で様々な取組が展開されることが重要と考えています。 このため、ビジョンでは、各主体がSDG sに取り組むことの意義やメリットとともに、優先課題ごとに、多様な主体に期待される「対応方向」、「取組イメージ」、更には各主体の活動内容に応じたSDGへのアプローチ手法などについて具体的に、かつ分かりやすく記載することを検討していきます。
19	道庁が発信するビジョンとなると、道庁が何かをやってくれるという印象になりがちだが、SDG sはそれぞれが自分事だということを感じてもらうための書きぶりやプロセスが必要。	
20	SDG sについて分かっている人はどんどんやっていけばいいが、分かっていない人には最初の入口から優しく丁寧に伝えていくほうがよい。また、自分達の生活に直接関わる部分が多くイメージできるとSDG sを理解しやすい。	
21	自分達の事業がSDG sに繋がっている、ということ、SDG sと関連する具体的な取組イメージで分かりやすく示してもらえると取り組みやすい。	
22	SDG sの根本は経済・社会・環境の3つを同時に解決することであるが、この部分がもう少し伝わるようなものになればいい。	SDG sの経済・社会・環境の三側面への統合的な取組は大変重要であるため、こうした考えが反映できるよう検討していきます。